

## 日本統治時代における台湾語仮名表記の変化過程

### — 「オ」「ヲ」表記の分析を通して—

林 美 秀

#### 1 はじめに

1895年の下関条約によって、台湾は日本の国土になった。しかし、台湾を統治するに際しては、言語不通という問題があった。この言語不通の問題を解決すべく、総督府の初代学務部長であった伊沢修二は、総督の樺山資紀に、台湾での教育についての意見書を提出した。この意見書は、「目下急要ノ教育関係事項」と「永遠ノ教育事業」からなり、「目下急要ノ教育関係事項」の第一番目には、以下の内容が挙げられている(台湾教育会1939:6-7)。

#### 目下急要ノ教育関係事項

##### 一、 彼我思想交通ノ途ヲ開クベキ事。

(甲) 新領地人ヲ民トシテ、速ニ日本語ヲ習ハシムル方法ヲ設クベシ。

(乙) 本土ヨリ移住セル者ヲシテ、日常須要ナル彼方言ヲ習ハシムル方法ヲ設クベシ。

すなわち、当時の台湾では、台湾人に日本語を教育する方法だけではなく、台湾に移住してきた日本人に台湾語を教育する方法も、その確立が急がれていた。日本人の台湾語学習には、日本語の仮名を用いて台湾語の発音を表記する方法が考案された。本研究では、これを「台湾語仮名表記」と称す。この台湾語仮名表記は、当時の「日台対訳辞書」(見出し語は日本語、語釈は台湾語)の中で最も規模の大きい『日台大辞典』にも見られる。『日台大辞典』は、小川尚義が中心となって編纂され、1907年に台湾総督府民政部総務局学務課の名義で出版された辞書で、当時の台湾語研究の集大成としても位置づけられるものである<sup>1</sup>。台湾語仮名表記の中に、日本語の仮名で表現できない台湾語の発音を表すために作られた「新造ノ符号仮名」と「新造ノ符号」が含まれている。それらの内容は次の通りである。

・「新造ノ符号仮名」：ㄝ、ㄞ、ㄟ、ㄠ、ㄡ

<sup>1</sup> 林2006を参照されたい。

・「新造ノ符号」：1. 出気音符号<sup>2</sup> ●

2. 八声符号 <sup>3</sup>	上平	上聲	上去	上入	下平	下去	下入
常音：	( )	ノ	ヽ	ノ	く		ヽ
鼻音：	b	6	9	o	α	β	o

『日台大辞典』には、「新造ノ符号仮名」と「新造ノ符号」以外にも、当時の日本で用いられていたものとは異なる表記法が見出される。例えば、①「ヌ」「ム」「ン」で台湾語の鼻音[n][m][ŋ]を表す(「ヌ」が[n]、「ム」が[m]、「ン」が[ŋ]を表す)、②小文字の「プ」「ツ」「ク」で、入声の[p][t][k]を表す、③「オ」と「ヲ」で違う発音を表す、などである。

それらの中で最も特徴的なのが、「オ」と「ヲ」を用いた表記である。日本語仮名遣いの「オ」「ヲ」については、小川1900と小川1902には、次の記述が見られる。(小川1900：21、小川1902：27)

学者ノ説ニヨレバ、「オヂ」ハ「オホヂ」(大父)ニシテ「ヲヂ」ハ小父ナリトイヘリ。即チ其當時ニテハ発音ニ差異アレバコソ仮名ニモ書キ分ケラレ、又意味ノ混同ヲ見ザリシナルベケレドモ、「ヲ」ト「オ」ノ音ガ混同セラル、時代ニナリテハ、従テ意義ノ混同ヲ来スニ至ルヲ以テ、一方ヲ「オジイ」トヤウニ呼ビ、一方ヲ「オジ」トヤウニ呼フニ至リシモノナルベシ。

このように、日本語仮名遣いの「オ」と「ヲ」で表される音は、当時発音の区別が殆ど付かなくなっていた。しかし、『日台大辞典』ではその「オ」と「ヲ」が違う台湾語発音の表記に用いられている。例えば、「姑コオ」「哥コヲ」「所ソオ」「鎖ソヲ」「圖トオ」「刀トヲ」「婦ボオ」「無ボヲ」「奴ロオ」「勞ロヲ」……などのように、「オ」と「ヲ」の使い分けが行われた。これらは、すなわち、「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」という台湾語オ段長音表記<sup>4</sup>の語である。台湾語の発音によると、前者の「オ」は[ɔ]で、後者の「ヲ」は[o]である。

また、後述のように、台湾語仮名表記の変化過程において、「オ」「ヲ」に関する台湾語仮名表記は、「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」という、台湾語オ段長音表記も含め、しばしば改訂の対象になっている。よって、本研究では、日本統治時代に出版された、台湾語仮名表記が使われた日本語・台湾語対訳著書(以下、「日台対訳資料」と称す)を利用して、オ段長音表記を含めた「オ」「ヲ」の分析を通して、台湾語仮名表記の変化過程を考察したい。

<sup>2</sup> 台湾語に在リテハ「カ」行、「タ」行、「バ」行、及ビ「マ」行ノ場合ニ於テ、之ヲ発音スルニ際シ、喉頭摩擦音(h)ヲ伴フコトアリ、普通之ヲ出気音ト称ス、其発音ハ「カハア」、「タハア」、「バハア」、「マハア」等ノ如シ。カ● キ● ク● ケ● コ●、タ● チ● ツ● テ● ト●、バ● ビ● プ● ペ● ボ●、マ● ㄇ● マ● ㄇ●、(『日台大辞典』「台湾語ノ発音」p8)

<sup>3</sup> 台湾語の声調は八声であるが、第二声と第六声の声調は同じであるので、実際は七声である。よって、『日台大辞典』に示された八声符号は、七つの声調となっている。

<sup>4</sup> 「オ段音+ウ」「オ段音+オ」「オ段音+ヲ」の台湾語仮名表記は、台湾語発音では長音にならないが、本研究では便宜上、この三種類の台湾語表記を「台湾語オ段長音表記」と呼ぶ。

## 2 台湾語仮名表記の変化過程

### 2.1 台湾語仮名表記の草創期 (1895~1901)

総督府名義で出版された最初の台湾語仮名表記が使用された書籍は『台湾十五音及字母附八声符号』(1895年12月28日)である。これは閩南語通俗韻書「十五音」に倣って、編纂された台湾語仮名表記による台湾語の音節表といったものである。樋口1984によると、「十五音」は閩南語研究の基礎である。(中略。)いわゆる「十五音」とは、明末から清初にかけて福建にあらわれた数種の方言韻書と、その流れをくむ雑多な版本の総称にすぎない。(p1)

『台湾十五音及字母附八声符号』が出版された後、1896年11月8日に『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』、同年11月14日に『台湾十五音及字母詳解』も発行された。本研究では、これら三冊の書籍を「三冊の台湾語音節表」と称す。

三冊の台湾語音節表の書名に見られる、「台湾十五音及字母」の「十五音」とは十五個の声母のことである。つまり、三冊の台湾語音節表は、声母と韻母を縦横に配列して、それが交差する所に、当該の声母と韻母の反切による発音を代表する文字を示したものである。これは、『韻鏡』と似た仕組みである。三冊の台湾語音節表の各文字には、台湾語仮名表記が付されており、それらは、総督府が規定した、規範的な台湾語仮名表記である。よって、三冊の台湾語音節表は、台湾語仮名表記についての解説書としての側面も持っていると言える。

『台湾十五音及字母附八声符号』(1895年12月28日)については、先行研究では、現存しないとされることもある。例えば、呉1955:12では、「『台湾十五音及字母表』は、その八声符号が『新日本語集甲号』に引用されていることが知られているが、原本は現存していない。」(日本語訳は筆者)とされ、洪1993:14では、「学務部は『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』を刊行する前に、『台湾十五音及字母表』という韻書の編纂を終えていたはずである。しかし、諸文献からもこの本の存在は確認できず、既に失われたものと思われる。」(日本語訳は筆者)とされている。しかし、富田2000:184によつて、この本が現存し、拓殖大学図書館に所蔵されていることが明らかとなった。

吉野1927には、「第二回講習員は甲乙二種に區別して之を募集し……兩種共客年十二月十五日着台し……其の土語教授の状況は甲乙兩種共に初は台湾十五音及字母表同詳解に就き発音及発声の練習を為さしめ(後略)」(p74)という記述が見られる。このように、三冊の台湾語音節表が発行されて間もない頃、1896年12月に始まった国語学校第二回の講習を受けた講習員たちに台湾語発音と発声の練習に、『台湾十五音及字母附八声符号』と『台湾十五音及字母詳解』が使用されたのである。

三冊の台湾語音節表は、総督府名義で出版されており、著者名は明記されていない。ただ、他の書籍との影響関係については、指摘できそうである。国府1931は、『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』は、「伊沢修二先生の日清字鑑とMacgowanのEnglish and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect及び同じ著者のA Manual of the Amoy Colloquialに拠るもの」<sup>5</sup>(p91)としている。実際に、台湾語仮名表

<sup>5</sup> なお、国府1931によると、この話は「昭和五年五月二十日小川尚義氏談」によるものである。

記を検証してみたところ、確かに『日清字音鑑』からの影響は指摘できるように思われる。

例えば、三冊の台湾語音節表の台湾語仮名表記には、①「ㄑ」で鼻音[ㄑ]を表す、②仮名の下に「●」を付けて台湾語の出気音を表す、③仮名の上に「ー」を付けて、日本語にない台湾語発音を示す、などの工夫が見られる。

そして、これらと同様の工夫は、『日清字音鑑』でも見られる。

例えば、①「ㄑ」で鼻音[ㄑ]を表す、②仮名の下に「○」を付けて台湾語の出気音を表す、③仮名の左や後ろに「ー」を付けて、日本語にない台湾語発音を示す、などである。

台湾語仮名表記について、小川1900は、次のように述べている。

台湾ノ音ヲ記スルニ方リテハ、原トヨリ古キ仮字遣トイフモノナケレバ、前ノ学務部長タリシ伊沢氏ハ、日本ノ仮字ニテ記シ得ラレザル四五ノ音ノ為メニハ、在来ノ仮字ニ新シキ記号ヲ付シテ、之ヲアラハスコト、シタリ。(p35)

また、小川は、『日台大辞典』の「台湾語ノ発音」でも、「右新造ノ符号仮名、及ビ符号ハ元学務長伊沢修二氏ノ製定セル所ナリ。」と述べており、以上のことから、台湾語仮名表記の原案は伊沢修二が考案したと考えられる。

『台湾十五音及字母附八声符号』が刊行される前の民間出版の日台対訳資料の台湾語仮名表記はかなり自由であった。例えば、『台湾土語』（1895年12月28日（再版）、佐野直記）では、「一○」「半△」のような、文字の右下に、「○」や「△」を付けて、入声や鼻音を表す表記が見られる。

三冊の台湾語音節表に規定された台湾語仮名表記は、台湾総督府出版の書籍に従われた。しかし、民間出版の日台対訳資料の殆どは依然として各自の表記法を使っている。

例えば、三冊の台湾語音節表には、小文字の「ㄑ」「ㄒ」「ㄒ」で入声、「●」で出気音、「（ ）」「／」「ヽ」「く」「|」「ヽ」(常音)「ㄅ」「ㄆ」「ㄇ」「ㄏ」「ㄏ」「ㄏ」(鼻音)などの八声符号で声調を表すと定められた。しかし、台湾語仮名表記の草創期（1895～1901）において、『台湾十五音及字母附八声符号』以後の民間出版の日台対訳資料（七冊）の中で、三冊の台湾語音節表に規定された入声、出気音、八声符号を確実に使ったのは、『台湾会話篇』（1896年3月15日、辻清蔵・三矢重松）、『日台会話新篇』（1899年7月16日、杉房之助）の二冊だけである。

次に、台湾語仮名表記の草創期（1895～1901）に出版された各日台対訳資料の台湾語オ段長音表記の実態を概観して行こう。台湾語仮名表記の草創期（1895～1901）の日台対訳資料におけるオ段長音表記をまとめると、表1の通りである。

#### a. 三冊の台湾語音節表が出版される前の書籍

三冊の台湾語音節表が出版される前の書籍では、さまざまなオ段長音表記がなされている。

現存最古と目される日本人が作った日台対訳資料は、『台湾語集』（1895年7月18日、俣野保和）で

ある。本書では、台湾語オ段長音の表記の殆どは「オ段音+一」であるが、「号ホオ」「道トウ」「糊コオ一」「烏オウ一」「桃ト一オ」などの表記も混在している。

『台湾言語集』(1895年8月29日、岩永六一)のオ段長音は主に「オ段音+ウ」(「烏トウ」)、「オ段音+一」(「雨ホ一」)の二種類になっているが、「鎖ソオ」「駝トラ」のような例外も見られる。

『台湾語』(1895年12月5日、田内八百久万)において、オ段長音は主に、「オ段音+|」(「路口|」)、「大ト|」など)と、「オ段音+オ」(「塗トオ」「無ボオ」など)の二通りの表記になっている。

また、前掲の『台湾土語』(1895年12月28日)では、台湾語オ段長音表記は、「オ段音+一」が最も多い。ただし、「塗と一」「塗とを一」「都と一」「都とを一」「好ほ一」「好ほを」のように、複数の表記がある語も存在している。また、「高こお」「膏こを」「戈こお一」「屠とお」「多とを」「徒とお一」などのように、同音の語に異なる表記が示されることも少なくない。

### b. 三冊の台湾語音節表が出版された後の書籍

三冊の台湾語音節表では、オ段長音に「オ段音+オ」「オ段音+ウ」の二通りの表記が規定された。しかし、この規定は、その後出版された日台対訳資料で遵守されたとは言い難い。

例えば、『台湾十五音及字母附八声符号』の「土」「租」の表記は、「ト●オ」「ワオ」、「好」「無」は「ホウ」「ボウ」である。しかし、『新日本語言集甲号』<sup>6</sup>(1896年2月11日、台湾総督府民政局学務部)の表記は、「土ト●オ」「租ワオ」、「好ホオ」「無ボオ」となっており、『台湾十五音及字母附八声符号』で「オ段音+ウ」と規定された語も、「オ段音+オ」で表記されている。『新日本語言集甲号』のオ段長音表記は、「与ホ一」「歩ボ一」などの僅かな例を除き、「オ段音+オ」である。

同じことは、総督府が出版した『台湾適用小学読方作文掛図教授指針』(1896年11月21日)、『台湾適用会話入門』(1896年11月30日)でも言える。この二冊の書籍のオ段長音表記も、僅かな例を除き、「オ段音+オ」である。

台湾語仮名表記の草創期(1895~1901)の日台対訳資料で、三冊の台湾語音節表の規定通りに、台湾語オ段長音表記を「オ段音+オ」と「オ段音+ウ」としているのは、管見の限りでは、『台湾会話篇』(1896年3月15日)、『日台小字典』(1898)、『日台会話新篇』(1899)だけである。

このように、台湾語仮名表記の草創期において、総督府が規定した台湾語オ段長音表記(「オ段音+オ」「オ段音+ウ」)を遵守した書籍は多くはない。しかし、『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』(1896年11月8日)、『台湾十五音及字母詳解』(同年11月14日)以後に出版された書籍では、『実用日台新語集』(1898年6月6日)を除き、それまでオ段長音に用いられていた「一」が使われなくなり、「オ段音+オ」

<sup>6</sup>本書は『台湾十五音及字母附八声符号』以後に出版されたが、『訂正台湾十五音及字母表』と『台湾十五音及字母詳解』より早く出版されたものであるため、厳密には三冊の台湾語音節表が出版された後の書籍にはならない。しかし、三冊の台湾語音節表におけるオ段長音表記が一致しているので、本論文では、便宜的に『台湾十五音及字母附八声符号』や『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』以後に出版された書籍も「三冊の台湾語音節表が出版された後の書籍」と見なす。

のみが使用されるか、「オ段音+オ」「オ段音+ウ」が併用されるかの二パターンとなった。すなわち、三冊の台湾語音節表の既定は、定着するところまではいかなかったが、混乱していた台湾語オ段長音表記を整える役割を果たしたと言える。

## 2.2 台湾語仮名表記の定着期 (1901~1931)

1901年に『訂正台湾十五音字母詳解』は台湾総督府民政部学務課の名義で刊行された。本書は台湾総督府が出版した最終の台湾語発音教材である。本書には、上記の『台湾十五音及字母詳解』に小川尚義の手による七つの訂正項目が付け加えられた。その中で、台湾語オ段長音表記と関わる項目は次の「蠓」韻に関する語の項目である。(『訂正台湾十五音字母詳解』の「緒言」p3)

- 一、従前、「蠓」ニ属スル諸音ヲ記スルニ、「オウ」等ノ仮字ヲ用井タリシガ、今ハ之ヲ改メテ、「オヲ」等ノ如ク記スルコトセリ。

すなわち、この項目において、『台湾十五音及字母詳解』の「オ段音+ウ」と表記された語を全部「オ段音+ヲ」と改めると規定された。

本書が刊行されてから出版された日台対訳資料のオ段長音表記の実態を見てみよう。表2-aは『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)以後に出版された日台対訳資料のうち、筆者が入手できた書籍(出版年不詳の書籍を除く)における台湾語オ段長音表記をまとめたものである。

表2-aによると、『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)以後出版された日台対訳資料において、台湾語オ段長音の仮名表記は、『日台俚諺詳解』(1913)を除き(台湾語オ段長音表記は「オ段音+オ」、「オ段音+ウ」になっている)、残りの書籍は全部「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」の二通りになっている<sup>7</sup>。それまでの台湾語オ段長音表記の不統一な状況は本書の出現によって改善されたと言える。

『日台大辞典』もこの規定に従い、『日台小字典』(1898)の「オ段音+ウ」の語は、『日台大辞典』(1907)では、全部「オ段音+ヲ」と表記されている。

この台湾語オ段長音表記の変更は、杉房之助が著した『日台会話新篇』(1899)と『日台会話大全』(1902)からも確認できる。前述の通り、『日台会話新篇』(1899)のオ段長音表記は、「オ段音+オ」(例：「所ソオ」「雨ホオ」「路ロオ」と「オ段音+ウ」(例：「無ボウ」「好ホウ」「多トウ」)である。

一方、『日台会話大全』(1902)のオ段長音表記は、「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」となっており、『日台会話新篇』で「オ段音+ウ」であったところが、すべて「オ段音+ヲ」となっている。このオ段長音表記の変更は、二冊の出版の間に出版された、『訂正台湾十五音字母詳解』に倣ったものであると

<sup>7</sup> 表2-aによると、『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)以後出版された日台対訳資料において、ゼロ声母のオ段長音の語(太字にしている語)の表記は、「オオ」「オヲ」(例えば、「烏オオ」「窩オヲ」)以外、「オ」「ヲ」「ヲヲ」(「烏オ」「蠓ヲ」「窩ヲヲ」という表記も使われていた。「オオ」「ヲヲ」と「オ」「ヲ」は音の長さで違うだけで、そのうえ、台湾語では、同じ発音の長さの違いで異なる意味が生じないため、両者を基本的に同じ表記を見なしていいと思われる。

言えよう。

日本統治時代における台湾語オ段長音表記は、その後、変更されることはなく、「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」がずっと用いられた。例えば、日本統治時代の後期に出版された『日台会話大全』（1937、改訂第23版）、『新訂日台大辞典上巻』（1938）、『台湾語教科書』（1944、改訂第11版）などでも、オ段長音は、全部「オ段音+オ」と「オ段音+ヲ」の二通りで表記されている。

### 2.3 台湾語仮名表記の成熟期 (1931~1945)

前述のように、『訂正台湾十五音字母詳解』の台湾語仮名表記は、その後の台湾でかなり長い期間使われた。しかし、その表記に関して、見直しが全く行われなかったということはない。日本統治時代に出版された日台対訳資料には、『訂正台湾十五音字母詳解』の「ㄐ」、「ㄑ」、「ㄒ」、「ㄓ」、「ㄔ」だけではなく、新造の符号仮名「ㄎ」「ㄎ」が見られる書籍がある。

この「ㄎ」「ㄎ」という新造の符号仮名を最初に登場させたのは、『国語対訳台語大成』（初版1916年）<sup>8</sup>である。「同安、泉州、漳州音ノ比較」という部分に、「ㄨ」ト「ㄨ」ノ中間音ノ仮名ハ「ㄎ」ヲ用ヒマス」「ㄨ」ト「ㄨ」ノ中間音ノ仮名ハ「ㄎ」ヲ用ヒマス」という説明が見られ、泉州音の表記に使われている。しかし、「ㄎ」「ㄎ」が見られるのは、「同安、泉州、漳州音ノ比較」という部分のみである。

『台日大辞典』（1931-1932）においても、この新造の符号仮名「ㄎ」「ㄎ」が使われている<sup>9</sup>。『台日大辞典』で「ㄎ」「ㄎ」が使われている語には、全部、泉州音であるという説明が付されている。例えば、「居住」という台湾語は、「ㄑㄨㄛ ㄗㄨㄛ 居住。(泉) 【居ㄑㄨㄛ住ㄗㄨㄛ】。」と記されており、「(泉)」によって泉州音であることが示されている。（【 】内は廈門音の語である。）

『台日大辞典』では、次に示す「凡例」にあるように、廈門音の語を標準としつつも、漳州音、泉州音の語もできるだけ採録する方針が取られていたようである。

本書に於て採用せる語音は主として廈門音を標準とせり、此れ廈門音は漳州音、泉州音の中間に位し、二者の特質を併有するを以てなり、然れども漳州、泉州其他に於て特別の音を有するものは又成るべく之を採録せり。  
(「凡例」p1)

『台日大辞典』では、「ㄎ」「ㄎ」は泉州音にのみ用いられており、廈門音、漳州音の語には使われていない。このことから、『台日大辞典』に見られる「ㄎ」「ㄎ」は、泉州音を表記するために加えられた新造の符号仮名であると言える。

<sup>8</sup> 現在、初版の入手は困難であるため、以下の記述は、筆者が入手できた第6版(1925年発行)に基づく。

<sup>9</sup> 『台日大辞典』において、「ㄎ」「ㄎ」の発音については次の説明が施されている(台湾語の声調符号を省略する)。

ㄎ 唇「ㄨ」舌「ㄨ」の位置にて発する音を表はす。

余ㄎㄎ 居ㄑㄨㄛ 暑ㄑㄨㄛ 鋸ㄑㄨㄛ 除ㄑㄨㄛ 慮ㄑㄨㄛ 魚ㄑㄨㄛ

ㄎ 唇「ㄨ」舌「ㄨ」(狭き「ㄨ」)の位置にて発する音を表はす。

鍋ㄎㄎ 遇ㄎㄎ 稅ㄎㄎ 火ㄎㄎ 飛ㄎㄎ 袋ㄎㄎ 尾ㄎㄎ

「ㄅ」「ㄆ」という新造の符号仮名<sup>10</sup>は『国語対訳台語大成』で初めて用いられたが、『台日大辞典』で泉州音の表記に使われたことで、広く世間の目に触れることになったと言える。

ところで、前述のように、『訂正台湾十五音字母詳解』（1901）以後、台湾語オ段長音の表記は「オ段音+オ」と「オ段音+ㄆ」の二通りで定着したが、オ段長音以外では、「オ」「ㄆ」の表記に揺れが見られる。具体的には、①イ段音の次に来る「オ」「ㄆ」表記、②ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ㄆ」表記の場合である。表2-bは筆者が入手した、『訂正台湾十五音字母詳解』（1901）以後出版された日本統治時代の日台対訳資料（出版年不詳の書籍を除く）における、①②の表記の語をまとめたものである。

#### ①イ段音の次に来る「オ」「ㄆ」表記

『訂正台湾十五音字母詳解』において、「イ段音+ㄆ」という表記がなく、「イ段音+オ」の表記になっている語は「腰」韻に属す語（例えば、「腰イオ」「焼シオ」など）である。表2-bから分かるように、「腰」韻の語については、「イ段音+オ」で表記する書籍と、「イ段音+ㄆ」で表記する書籍がある。両者は割合から言うと、ほぼ互角である。中には、『日台会話初歩』（1908）のように、「イ段音+ㄆ」（「釣ㄆㄆ」「票ピ・ㄆ」など）、「イ段音+ヨ」（「菓イヨ」「石チヨ」「蓆チヨ」など）と、「イ段音+ヨㄆ」（「茄キヨㄆ」「橋キヨㄆ」「少チヨㄆ」など）が混在している書籍もある。このように、「腰」韻の語の表記は、資料によってまちまちであり、統一されていない。

小川尚義が中心となって編纂し、総督府の名義で出版された『日台大辞典』（1907）でも、「腰」韻に属す語は「イ段音+オ」で表記されている。しかし、同じく小川尚義が中心となって編纂し、総督府学務課の名義で出版された『台日大辞典』（1931-1932）では、「腰」韻に属す語は「イ段音+ㄆ」で表記されている。

『台日大辞典』以後に出版された日台対訳資料でも、「腰」韻に属す語は、全部「イ段音+ㄆ」という表記になっている。これはつまり、『台日大辞典』が「イ段音+ㄆ」という表記を採用したことが、他の書籍に影響を及ぼし、不統一の状況が改善されたということである。このことは、何回も版を重ねた『日台会話大全』（杉房之助）からも確認できる。

1902年に出版された『日台会話大全』はその後、何回も重版された。以下では、現存する1902年の初版、1925年の第20版、1937年の改訂第23版を対象として、台湾語仮名表記における「オ」「ㄆ」表記の変化を検証する。下記の表3、表4、表5は、『日台会話大全』の各版におけるオ段長音の「オ」

<sup>10</sup>『国語対訳台語大成』の編纂者は劉克明であるが、「ㄅ」「ㄆ」という新造の符号仮名を作ったのが劉克明であるかは断言できない。『国語対訳台語大成』は、当時、台湾総督府編集官であった小川尚義が校閲をしており、小川尚義の意見で『国語対訳台語大成』に用いられた可能性もある。『台日大辞典』との関係から述べれば、劉克明が作った符号仮名を、小川尚義が『台日大辞典』で用いた可能性もあれば、小川尚義が『台日大辞典』で用いる予定だった符号仮名の使用を、劉克明に助言した可能性もあるということである。しかし、いずれにしても、劉克明と小川尚義が関わっていることは間違いないと考えられる。

表3 「オ段音+オ」

1902年 初版	1925年 第20版	1937年 改訂第23版
五ゴオ	五ゴオ	五ゴオ
願コオ	願コオ	願コオ
雨ホオ	雨ホオ	雨ホオ
給ホオ	給ホオ	給ホオ
布ボオ	布ボオ	布ボオ

表4 「オ段音+ヲ」

1902年 初版	1925年 第20版	1937年 改訂第23版
搔ソヲ	搔ソヲ	搔ソヲ
刀トヲ	刀トヲ	刀トヲ
号ホヲ	号ホヲ	号ホヲ
無ボヲ	無ボヲ	無ボヲ
討ト・ヲ	討ト・ヲ	討ト・ヲ

表5 「イ段音+オ、ヲ」

1902年 初版	1925年 第20版	1937年 改訂第23版
橋キオ	橋キオ	橋キヲ
焼シオ	焼シオ	焼シヲ
招チオ	招チオ	招チヲ
葉イオ	葉イオ	葉イヲ
葉ヒオ	葉ヒオ	葉ヒヲ

「ヲ」表記、イ段音の次に来る「オ」「ヲ」表記をまとめたものである。

表3～表5から、1902年の初版と1925年の第20版では、台湾語仮名表記の「オ」「ヲ」の表記方針が全く同じであることが分かる。オ段長音には「オ」「ヲ」の書き分けが見られるが、「腰」韻に属す語に関しては全部「オ」で表記している。

一方、1937年の第23版では、「オ段音+オ」「オ段音+ヲ」の表記は、1902年の初版や1925年の第20版と同じであるが、「腰」韻に属す語の表記は異なっている。表5から、1902年の初版と1925年の第20版では、「腰」韻に属す語には「オ」が用いられているのに対し、1937年の改訂第23版では、それらが全部「ヲ」で表記されていることが分かる。これは前述の『台日大辞典』と同じ表記であり、表5の語は、『台日大辞典』でも全部「イ段音+ヲ」である。すなわち、1937年の改訂第23版における「オ」「ヲ」の書き分けは、『台日大辞典』と一致していることになる。このように、『日台会話大全』の「オ」「ヲ」表記の変化には、『台日大辞典』(1931-1932)の影響が考えられる。

同様のことは、台湾総督府警察官及司獄官練習所が編纂した、『台湾語教科書』(1922)、『台湾語教科書』(1932)、『台湾語教科書』(1944)からも確認できる。これらはすべて同じ書名であるが、『台湾語教科書』(1922)と『台湾語教科書』(1932)は、内容が異なる別の書籍で、『台湾語教科書』(1932)と『台湾語教科書』(1944)は、同内容の書籍であり、後者が前者の改訂第11版である。

『台湾語教科書』(1922)では、「腰」韻に属す語の表記は、「叫キオ」「小シオ」「焼シオ」「尿ジオ」「招チオ」のように、「イ段音+オ」となっている。

他方、『台湾語教科書』(1932)と『台湾語教科書』(1944)では、「腰」韻に属す語の表記は、「叫キヲ」「小シヲ」「焼シヲ」「尿ジヲ」「招チヲ」のように、「イ段音+ヲ」となっている。

このように同一の編纂者による書籍で、「腰」韻に属す語の表記が変化していることから、『台日大辞典』(1931-1932)が以後に出版された日台対訳資料に、表記面での影響を及ぼしていることが言えるであろう。

ところで、「腰」韻に属す語を「イ段音+ヲ」で表記したのは、『台日大辞典』が最初ではない。しかし、以上の検証から、本辞書の出現によって、日台対訳資料の「腰」韻に属す語の表記が、「イ段

音+ヲ」に統一されたと言えるのではなかろうか。

前述のように、台湾語のオ段長音表記を台湾語の発音から判断すると、「オ」は[ɔ]、ヲは[o]を表す。「腰」韻に属す「橋」「焼」「招」「葉」「葉」の台湾語の発音は、「橋」[gio]「焼」[sio]「招」[chio]「葉」[io? ]「葉」[hio? ]であり、これを忠実に仮名表記すると、「橋キヲ」「焼シヲ」「招チヲ」「葉イヲ」「葉ヒヲ」のように、「イ段音+ヲ」となる。このことから、『台日大辞典』における「腰」韻に属す語の表記の改訂により、台湾語仮名表記は、実際の発音に近い、完成された形になったと言える。

## ②ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記

『訂正台湾十五音字母詳解』では、ゼロ声母且つ二重母音の語は、語頭が「オ」となっており、「ヲ」となっている語はない。例としては、「倚オア」「歪オアイ」「冤オアヌ」「嘆オアン」「話オエ」「(碗オア)」「(椗オアイ)」<sup>11</sup>などが挙げられる。それらは、『訂正台湾十五音字母詳解』で、「歌」韻、「歪」韻、「冤」韻、「嘆」韻、「話」韻、「麻」韻、「關」韻に属するゼロ声母の語である。しかし、『訂正台湾十五音字母詳解』以後に出版された日台対訳資料には、それらの語の「オ」を「ヲ」と表記しているものも少なくない。すなわち、『訂正台湾十五音字母詳解』における①②の「オ」の表記は、その後出版された日台対訳資料で、そのまま踏襲されることもあれば、「ヲ」と表記されることもあったということである。

表2-bによると、『訂正台湾十五音字母詳解』以後に出版された日台対訳資料では、ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」の表記に、A. 全部「オ」表記、B. 全部「ヲ」表記、C. 「オ」「ヲ」表記の併用、という三つのタイプがある。

B. 全部「ヲ」表記となっている最初の書籍は、1911年の『埤圳用語』である。それ以前の書籍では、ゼロ声母且つ二重母音の語頭の表記は、全部「オ」となっている。また、C. 「オ」「ヲ」表記の併用となっている最初の書籍は、1922年の『台湾語捷徑』である。

『台日大辞典』(1931-1932)の出版後、ゼロ声母且つ二重母音の語頭がA. 全部「オ」表記となる書籍は見られない。ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記は、『台日大辞典』の出版により、整備されたと言える。

しかし、『台日大辞典』出版後も、完全にB. 全部「ヲ」表記となったわけではなく、『台湾語之研究』(1931、熊谷良正)、『実業教科台湾語及書翰文』(1934、劉克明)、『新選台湾語教科書』(1935、張耀堂)の三冊(表2-bで点線で囲んでいる書籍)は、C. 「オ」「ヲ」表記の併用となっている。

また、①イ段音の次に来る「オ」「ヲ」表記の検証で用いた、『日台会話大全』(1902年初版、1925年第20版、1937年改訂第23版)や、『台湾語教科書』(1922)、『台湾語教科書』(1932)、『台湾語教科書』

<sup>11</sup> 「麻」韻と「關」韻に属す語は、鼻音化韻母[˙]を含む語である。台湾語仮名表記では、「碗オア6」「椗オアイト」のように、鼻音化韻母は鼻音の八声符号によって示される。本論文では、八声符号は省略し、「麻」韻に属す語(「碗」「換」「晏」と、「關」韻に属す語(「椗」など)には、( )を付けて示す。

(1944。1932の改訂第11版)においても、『台日大辞典』の出版前と後とで、ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」の表記に変化が見られる。(表2-bを参照されたい。)

『日台会話大全』の初版(1902年)と第20版(1925年)では、ゼロ声母且つ二重母音の語頭は「オ」で表記されているが、改訂第23版(1937年)では、全部「ヲ」となっている。同様に、『台湾語教科書』(1922)では、ゼロ声母且つ二重母音の語頭は、「オ」で表記されているが、『台湾語教科書』(1932)、『台湾語教科書』(1944。1932の改訂第11版)では、「ヲ」となっている。

以上の検証から、ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記は、『台日大辞典』の出現によって、完全とは言えないまでも、整備されたと言えよう。

### 3 おわりに

以上の分析から、台湾語仮名表記の変化過程は、次の表6のようにまとめることができる。

表6

台湾語仮名表記の三段階	規範が示された書籍・変わり目となった書籍
草創期 (1895～1901)	『台湾十五音及字母附八声符号』(1895)『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』(1896)『台湾十五音及字母詳解』(1896)
定着期 (1901～1931)	『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)
成熟期 (1931～1945)	『台日大辞典』(1931-1932)

台湾語仮名表記は、『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)までは、幾度もの改訂がなされた。しかし、『訂正台湾十五音字母詳解』以降は、『訂正台湾十五音字母詳解』に規定された台湾語仮名表記が使われ続け、『台日大辞典』においても、小幅な修正が行われたのみである。

①イ段音の次に来る「オ」「ヲ」表記、②ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記に関しては、『訂正台湾十五音字母詳解』以降も、その表記には揺れがあった。しかし、全体的に見れば、『訂正台湾十五音字母詳解』の刊行によって、日本統治時代の台湾語仮名表記は定着をみたと言える。そして、①イ段音の次に来る「オ」「ヲ」表記、②ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記を整備した『台日大辞典』の刊行によって、台湾語仮名表記は成熟の段階を迎えたのである。

ところで、定着期の『訂正台湾十五音字母詳解』と、成熟期の『台日大辞典』は、どちらも小川尚義の手によるものである。小川尚義は、1896年12月15日<sup>12</sup>に台湾の地を踏んだ。そのため、台湾語仮名表記の原点とも言える、『台湾十五音及字母附八声符号』(1895)、『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』(1896)、『台湾十五音及字母詳解』(1896)の編纂には関わっていない。しかし、以後の台湾語

<sup>12</sup>小川尚義1927「三十年前の思ひ出」による。

仮名表記の規範となった『訂正台湾十五音字母詳解』と、台湾語仮名表記の完成形を示した『台日大辞典』を生み出した人物であることを考えると、小川尚義は台湾語仮名表記の変化過程において最も重要な人物であったと言えよう。

また、『国語対訳台語大成』（1925年第6版、劉克明）の表記は、『訂正台湾十五音字母詳解』の表記とは異なっており、①「腰」韻に属す語は「イ段音+ㄚ」表記で、②ゼロ声母且つ二重母音の語頭には「オ」「ㄚ」表記が併用されている。しかし、『国語対訳台語大成』には、小川尚義の校閲があったことが明記されており、本書の表記も、小川尚義と関わるものと言える。小川は、『国語対訳台語大成』の初版年である1916年、或いはもっと早い時期に、『訂正台湾十五音字母詳解』で規定した①②の表記を改訂する意向を持っていて、それを『台日大辞典』（1931-1932）で実現させたのかもしれない<sup>13</sup>。

他にも、当時規範とされた台湾語仮名表記（表9の「変わり目となった書籍」に示されている表記）とは、異なった表記を採用している著書は存在する。このことから、総督府は、規範となる台湾語仮名表記を示しはしたが、その台湾語仮名表記に従うことを強要しはしなかったと言えよう。

### 参考文献

〈日本語参考文献〉（アイウエオ順）

伊沢修二1895『日清字音鑑』大日本図書株式会社

小川尚義1900「仮名遣ニ関スル調」『国語研究会報』1号、復刻版：ひるぎ社、1996年

小川尚義1927「三十年前の思ひ出」、『台湾教育史』吉野秀公著 台湾日日新報社所収

国府種武1931『台湾における国語教育の展開』台北第一教育社

台湾教育会1939『台湾教育沿革誌』、復刻版：青史社、1982年

台湾総督府民政部学務課1901『訂正台湾十五音字母詳解』（小川尚義執筆）※出版社表示なし

台湾総督府民政部総務局学務課1902『国民読本参照仮名遣法』台湾日日新報社（小川尚義執筆）

冨田哲2000『統治者の言語学—日本統治時代初期台湾での言語研究と言語教育—』名古屋大学大学院国際開発研究科博士学位請求論文

樋口靖1984「十五音」と「台湾十五音」—台湾語研究のために—『筑波中国文化論集』第5号

吉野秀公1927『台湾教育史』台湾日日新報社

林美秀2006「『日台大辞典』の方言語彙」『岡大國文論稿』第34号

<sup>13</sup>ただし、『国語対訳台語大成』では、②ゼロ声母且つ二重母音の語頭に、「オ」「ㄚ」表記が併用されているが、『台日大辞典』では、それらが全部「ㄚ」で表記されている。

〈中国語参考文献〉(画数の少ない順)

吳守禮1955『近五十年來台語研究之總成績』 自費出版

洪惟仁1993「日據時代的台語辭典編纂」『閩南語經典辭書編纂 5 日台大辭典 (上)』台北武陵出版社

〈日本語テキスト〉

表1、表2-a、表2-bに示されている各日台対訳資料。

表2-a 『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)以後に出版された日台対訳資料のオ段長音表記

『訂正台湾十五音字母詳解』では、上入声と下入声の「オ段音+ヲ」の語(「𪗇 韻に属す語)は、「卓トヲ」「落ロヲ」「薄ボヲ」のように、小文字の「ヲ」を用いて表記されているが、表2-aに挙げた書籍の多くは、印刷が悪いため、小文字の「ヲ」と大文字の「ヲ」を判断しにくい。そこで、それらの語は全部小文字の「ヲ」を用いて示し、「/」でほかの語とは区別した。また、『訂正台湾十五音字母詳解』とは異なる台湾語オ段長音表記の語に下線を付した。

表2-b 『訂正台湾十五音字母詳解』(1901)以後出版された日台対訳資料におけるイ段音の次に来る「オ」「ヲ」表記、ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」表記

『訂正台湾十五音字母詳解』では、「腰 韻に属す上入声と下入声の語は、「葉イオ」「借チオ」「石チオ」「葉ヒオ」のように、小文字の「オ」を用いて表記している。また、「歪オアイ」「冤オアヌ」「囃オアン」のように、小文字の「ア」を用いて表記している語もある。「歌 韻のゼロ声母の語で下入声の語、例えば、「活オア」なども、小文字の「ア」を用いて表記している。しかし、表2-bに挙げた書籍の多くは、印刷が悪い、小文字の「オ」「ヲ」「ア」と、大文字の「オ」「ヲ」「ア」の見分けが付きにくい。そこで、それらの語は、全部小文字の「オ」「ヲ」「ア」で示し、「/」でほかの語と区別する。なお、「麻 韻に属す「碗」「換」「晏」と「關 韻に属す「桎」などの鼻母音を含む語は( )を付けて示す。

書名	編者	筆者が使用した書籍の出版年/初版年	発行所	表2-a		表2-b			
				オ段音+オ	オ段音+ヲ	イ段音+オ	イ段音+ヲ	ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「オ」「ヲ」	ゼロ声母且つ二重母音の語頭に来る「ヲ」
1. 『訂正台湾十五音字母詳解』	台湾總督府民政部字務課	1901年3月31日(初版)	台湾總督府民政部字務課	烏オオ、結コオ、舌トオ、所ソオ、鹿トオ、雨ホオ、路ロオ	縮オツ、告コツ、額ソツ、刀トツ、好ホツ/学オツ	縮イオ、叫キオ、小シオ、票ビオ、票ビオ/票チオ、票ヒオ		話オエ、替オア、活オア、置オアイ、冤オアヌ、囃オアン、(囃オア)、(囃オアイ)	
2. 『台語類編』	中島 謙吉(台湾總督府編修書記)	1902年3月29日(初版)	台湾日日新報社	烏オオ、可コオ、敷ソオ、土トオ、オ、蘇ホオ、布ボオ	額オツ、好ホツ、無ボツ、報ボツ/学オツ、威トツ	縮イオ、叫キオ、相シオ、少チオ/葉イオ、情シオ		縮オア、(縮オア)/怨オアヌ、歪オアイ、活オア	
3. 『日台会話大全』	杉野之助(新聞記者)	1902年7月5日(初版)	博文堂	烏オオ、額コオ、土ゴオ、所ソオ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ	額オツ、額ソツ、刀トツ、射トツ、号ホツ、無ボツ/学オツ	縮キオ、換シオ、尿ジオ、招チオ、笑チオ/葉イオ、葉ヒオ		縮オエ、話オエ、替オエ、(換オア)	
4. 『台湾語彙音心得』	林久三(台湾總督府警察官及司獄官練習所教官)	1903年4月28日(初版)	盛文館	烏オオ、額コオ、五ゴオ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ	縮オツ、告コツ、刀トツ、好ホツ、抱ホツ/学オツ		尿ジツ、少チツ、照チツ	話オエ、能オエ	
5. 『台湾名詞集』	杉野之助、林久三	1903年6月12日(初版)	博文堂	烏オオ、字オオ、結コオ、鹿ホオ、布ボオ、戸ロオ	縮オツ、高コツ、換トツ、好ホツ、無ボツ/威トツ	縮キオ、換チオ、尿ジオ、票イオ/葉イオ、石チオ	葉チツ	縮オエ、(換オア)/丸オアヌ	
6. 『日台新詳』	杉野之助	1904(初版)	日本物産合資会社支店	烏オオ、字オオ、故コオ、敷ソオ、土トオ、鹿ホオ、布ボオ	縮オツ、額ソツ、額トツ、換トツ、号ホツ/学オツ、威トツ	縮キオ、換シオ、招チオ、票ビオ/葉イオ、石チオ、葉チオ		替オア、話オエ、替オエ、換オア/歪オアイ、完オアヌ	
7. 『日台商用会話集』	市成乙重	1904(初版)	台語会	烏オオ、古コオ、五ゴオ、招チオ、土トオ、布ボオ	河ホツ、好ホツ、無ボツ/辱ボツ		招イワ、替キワ、相シツ、票ビツ/葉イツ	縮オエ、能オエ、話オエ/濁オアヌ	
8. 『日台大辞典』	小川尚義	1907(初版)	總督府民政部郵務課	烏オオ、五ゴオ、蘇ソオ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ、路ロオ	額オツ、高コツ、額ソツ、刀トツ、号ホツ、無ボツ/威トツ、学オツ	縮イオ、換キオ、換シオ、票イオ/葉イオ、情シオ、石チオ、葉ヒオ		縮オエ、話オエ、能オエ、(換オア)、(換オア)/濁オアヌ、歪オアイ	
9. 『日台小辞典』	小川尚義	1908年3月24日(初版)	台湾總督府	烏オオ、額コオ、古コオ、五ゴオ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ	換オツ、額オツ、果コツ、号ホツ/露ロツ	縮キオ、相シオ、笑チオ、票ビオ/葉イオ、石チオ		縮オエ、話オエ、話オエ、(晏オア)/濁オアヌ	
10. 『日台会话初歩』	林久三(台湾總督府法院通訳)	1908年5月30日(再版) / 1908年4月20日(初版)	補生堂	烏オオ、舌コオ、鹿トオ、土トオ、オ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ、路ロオ	新オツ、道トツ、射トツ、号ホツ、好ホツ、無ボツ、票ビツ/威トツ		約キツ、票ビツ/葉イツ	話オエ、能オエ、(換オア)、(換オア)/濁オアヌ、濁オアヌ	
11. 『埔里用語』	岩崎敬太郎(台湾總督府土木部通訳)	1911(初版)	台湾語通訳研究会	烏オオ、結コオ、額コオ、戸ホオ、鹿トオ、雨ホオ、布ボオ	高ツツ、高コツ、刀トツ、号ホツ、無ボツ/威トツ		罵イワ、替キワ、換シツ、招チツ、辱ビツ、擦リツ	替ワエ、能ワエ、替ワエ	
12. 『日台俚語詳解』	片岡廉(台湾總督府法院通訳)	1913(初版)	台湾語研究会	烏オオ、五ゴオ、渡トオ、換トオ、収ロオ、無ボオ	(刀トツ、無ボツ)	小シオ、換シオ、笑チオ/石チオ	置チオ	縮オエ、話オエ、替オア/活オア、冤オアヌ	
13. 『台湾笑話集』	川合真水	1915(初版)	台湾日日新報社	五ゴオ、換ゴオ、給ホオ、歩ボオ、路ロオ	号コツ、額トツ、好ホツ、無ボツ/嘴オツ、無コツ	縮キオ、小シオ/葉イオ、拾キオ、借チオ		縮オエ、能オエ、話オエ、換オア、(換オア)/濁オアヌ	
14. 『台訳国語教本』	宇井美	1915(第3版) / 1913年(初版)	新高堂書店	烏オオ、所ソオ、雨ホオ、布ボオ、路ロオ	阿オツ、刀トツ、号ホツ、無ボツ/学オツ、露ロツ	縮イオ、換キオ、少シオ、換ビオ/情シオ、尺チオ		縮オエ、話オエ、(晏オア)/濁オアヌ、濁オアヌ	
15. 『新撰日台語彙集』	岩崎敬太郎	1916(再版) / 1913(初版)	日台語彙集発行所	烏オオ、結コオ、戸ホオ、鹿トオ	高ツツ、額ツツ、高コツ、刀トツ、号ホツ		罵イワ、替キワ、尿ジツ、招チツ、票ビツ	替ワエ、換ワエ、能ワエ/濁オアヌ	
16. 『国語彙注』	台湾教育会	1918(第14版) / 1915(初版)	台湾教育会	縮オオ、字オオ、結コオ、布ボオ、路ロオ、好ホオ	高コツ、額トツ、多トツ、保ボツ、好ホツ/学オツ	縮イオ、叫キオ、票チオ、換ビオ、票ビオ/借ヒオ	叫キツ/石チツ	縮オエ、能オエ、換オエ、話オエ/眞オアヌ	
17. 『警察官話集』	林久三(台湾總督府警察官及司獄官練習所教官)	1919(第13版) / 1903(初版)	台湾日日新報社	烏オオ、票オオ、五ゴオ、所ソオ、鹿トオ、収ロオ、路ロオ	高オツ、道リツ、好ホツ、票ボツ、報ボツ/学オツ		小シツ、叫キツ、尿ジツ/葉イツ、辱トツ	話オエ、能オエ、能オエ/濁オアヌ、活オア	
18. 『新撰実用日台会話』	川合真水	1921(第12版) / 1912(初版)	台湾語通訳研究会	烏オオ、五ゴオ、渡トオ、雨ホオ、布ボオ、路ロオ	額トツ、好ホツ、無ボツ、報ボツ/学オツ	縮キオ、換シオ、少チオ/葉イオ、情シオ		縮オエ、換オエ、(換オア)、(換オア)/濁オアヌ、濁オアヌ	
19. 『台湾語彙注』	范至丞	1922年8月5日(初版)	台湾子供世界社	烏オオ、五ゴオ、渡トオ、鹿ホオ、布ボオ、収ロオ	高ツツ、高コツ、刀トツ、号ホツ、結コツ/辱ボツ	縮キオ	叫キツ、換ビツ、票ビツ/借チツ、石チツ、葉トツ	話オエ、能ワエ、(晏オア)/濁オアヌ、濁オアヌ	
20. 『台湾語彙』	岩崎敬太郎	1922(第2版) / 1922年8月10日(初版)	台湾語彙発行所	烏オオ、額コオ、招チオ、土トオ、戸ホオ、鹿トオ	高ツツ、額ツツ、号ホツ、高コツ、額トツ、号ホツ、無ボツ		罵イワ、換シワ、招チツ、擦リツ/葉イツ、辱トツ	話オエ、能ワエ、(晏オア)/濁オアヌ、濁オアヌ	
21. 『台湾語教科書』	台湾總督府警察官及司獄官練習所	1922(初版)	松華堂	縮コオ、五ゴオ、所ソオ、戸ホオ、鹿トオ	多トツ、無ボツ、好ホツ、無ボツ、報ボツ	叫キオ、小シオ、換シオ、尿ジオ、招チオ/葉ヒオ		話オエ、能オエ、(換オア)/冤オアヌ	

書名	編者	筆者が使用した書籍の出版年/初版年	発行所	表2-a		表2-b		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「オ」	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
				オ段音+オ	オ段音+ワ	イ段音+オ	イ段音+ワ		
22. 『専売局台湾語第一書』	岩崎敬太郎	1922(初版)	台湾總督府専売局	烏オ、結コオ、租リオ、戸ホオ、盧ロオ	高ワ、唎ワ、高コワ、例トワ、羅ロワ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、辰ジワ/羅イヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
23. 『専売局台湾語第二書』	岩崎敬太郎	1923(初版)	台湾總督府専売局	烏オ、盧コオ、可コオ、所ソオ、土ト・オ、路ロオ	唎ワ、羅ワ、例トワ、好ホワ/落ロ		燒シワ、小シワ/石チヤ、尺チヤ、着フヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
24. 『国語対訳台湾語大』	劉克明(台北師範學校教諭)	1925年7月5日(第6版)/1916(初版)	新高堂書店	烏オオ、古コオ、苦コ・オ、因トオ、多ボオ、路ロオ	高ワ、高コワ、例トワ、好ホワ、宝ボワ/学ワヤ、盧トヤ	着フオ	唎キワ、燒シワ、小シワ、羅キワ、羅ビワ/着フヤ	高オア、(奥オア)、(例オア)/高オア、完オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
25. 『台湾語選集』	劉克明(台北師範學校教諭)	1925年12月30日(初版)	新高堂書店	烏オオ、結コオ、例トオ、羅ホオ、路ロオ	例トワ、高ワ、高コワ、高コワ、刀トワ、例トワ/学ワヤ、羅ガヤ		燒シワ、高ワ、高コワ、高コワ/尺チヤ	(換オア)、(例オア)/高オア、完オア、員オア、遠オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
26. 『日台会話大全』	杉原之助	1925(第20版)/1902(初版)	博文堂	烏オオ、羅コオ、上トオ、五ゴオ、南ホオ、給ホオ、布ボオ	羅オワ、羅ソワ、刀トワ、射トワ、号ホワ、無ボオ/学オ	羅キオ、燒シオ、尿ジオ、招チオ、笑チオ/羅イオ、羅ヒオ		能オエ、話オエ、羅オエ、(例オア)	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
27. 『実業教育台湾語及書翰文』	劉克明(台北師範學校教諭)	1926(初版)	新高堂書店	烏オオ、手オオ、所ソオ、戸ホオ、多ボオ、布ボオ、路ロオ	羅ワ、高ワ、高コワ、高コワ、老ロワ/羅ワヤ、盧トヤ		羅イヤ、羅キワ、小シワ、羅キワ、羅ビワ/羅キヤ	高オア、(換オア)/高オア、完オア、員オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
28. 『台湾語彙』	岩崎敬太郎	1927年3月20日(第5版)/1922年8月10日初版	新高堂書店	烏オオ、羅コオ、五ゴオ、租リオ、戸ホオ、路ロオ	高ワ、高ワ、学ワ、羅ワ、高コワ、刀トワ、例トワ、号ホワ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、招チワ、羅ビワ/羅イヤ、羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
29. 『刑務所用台湾語彙』	今田祝胤(台北刑務所臺北刑務所嘱託)	1929(初版)	新高堂書店	烏オ、結コオ、所ソオ、数ソオ、羅ホオ、南ホオ、布ボオ、路ロオ	高ワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、号ホワ、保ボワ/高ロ		羅イヤ、燒シワ、辰ジワ、笑チワ、羅ビワ/羅イヤ、休ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
30. 『勸業用台湾語実習資料』	台南州農會	1930(初版)		烏オオ、古コオ、五ゴオ、土ト・オ、羅ロオ、路ロオ、報ボオ、号ホオ	阿ワ、高ワ、刀トワ、好ホワ、保ボワ	羅キオ、笑チ・オ/羅イオ 漢字表記: 羅イヨ、着フヨ		高オエ/高オア、員オア、重オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
31. 『台湾語彙』	岩崎敬太郎	1931年1月3日(第7版)/1922年8月10日初版	新高堂書店	烏オオ、羅コオ、租リオ、戸ホオ、盧ロオ	高ワ、羅ワ、高コワ、高コワ、刀トワ、号ホワ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、招チワ、羅ビワ/羅イヤ、羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
32. 『日台大辞典』	小川尚義	上巻1931年3月10日、下巻1932年3月31日	台湾總督府	烏オオ、五ゴオ、羅ソオ、戸ホオ、布ボオ、路ロオ	羅ワ、高ワ、高コワ、高コワ、刀トワ、例トワ/学ワヤ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、羅ビワ/羅イヤ、羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
33. 『台湾語之研究』	熊谷貞正(台北洲通商)	1931年4月30日(初版)	台湾日日新報社	烏オオ、古コオ、五ゴオ、租リオ、土ト・オ、布ボオ	高ワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、無ボワ		笑チ・ワ、羅ビ・ワ/羅イヤ、尺チヤ、羅ヒヤ	(換オア)/員オア、高オア、高オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
34. 『日台新辞書』	東方孝儀	1931年7月(初版)	台湾警察協會	烏オオ、羅コオ、所ソオ、所ソオ、土ト・オ、多ボオ、路ロオ	高ワ、高ワ、好ホワ、羅ガワ/羅トヤ、羅ロ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、笑チワ、羅ビワ/羅イヤ、羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
35. 『台湾語教科書』	台湾總督府警察官及司獄官講習所	1932(初版)	無名会出版部	烏オ、結コオ、租リオ、戸ホオ、路ロオ	高ワ、羅ワ、唎ワ、高コワ、刀トワ、号ホワ、羅ガワ		唎キワ、小シワ、燒シワ、辰ジワ、招チワ/羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
36. 『刑務所用台湾語』	今田祝胤(台北刑務所臺北刑務所嘱託)	1933(第訂再版)/1929(初版)	新高堂書店	烏オ、結コオ、数ソオ、羅ホオ、布ボオ、路ロオ	高ワ、唎ワ、高コワ、刀トワ、号ホワ、無ボワ/高ロ		羅イヤ、唎キワ、燒シワ、羅ビワ、羅ヒヤ/羅ヒヤ、着フヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
37. 『実業教育台湾語及書翰文』	劉克明(台北師範學校教諭)	1934(再版)/1926(初版)	新高堂書店	烏オオ、羅コオ、手オオ、古コオ、盧コ・オ、所ソオ、多トオ、泥ホオ、布ボオ、路ロオ	高ワ、高ワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、老ロワ/高トヤ、高ボヤ		唎キワ、小シワ、少シワ、羅キワ、羅ビワ/羅キヤ、着フヤ	(換オア)/高オア、員オア、高オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
38. 『台湾語法』	羅輝龍(台湾總督府警察官及司獄官講習所教諭)	1934年12月1日(再版)/1934年7月20日初版	台湾語學社	烏オ、羅コオ、唎コオ、五ゴオ、租リオ、土ト・オ、羅ホオ、路ロオ	高ワ、高ワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、羅ガワ/高ロ		燒シワ、石チワ、羅ビワ/着フヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
39. 『新編台湾語教科書』	張運章(台北師範學校教諭)	1935(初版)	新高堂書店	子オオ、羅ホオ、古コオ、五ゴオ、租リオ、租リオ、土ト・オ、多ボオ	高ワ、高ワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、羅ガワ/高ロ	借チオ	唎キワ、小シワ、笑チワ、羅ビワ/羅ヒヤ、着フヤ	(換オア)/高オア	ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
40. 『警察官対民衆台語講話用範』	小野西洲	1935(初版)	台湾語通商研究會	烏オ、羅コオ、羅ゴオ、所ソオ、羅ソオ、羅ホオ、羅ホオ、路ロオ	高ワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、羅ガワ/高ロ		唎キワ、小シワ、燒シワ、少シワ/羅ヒヤ、着フヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
41. 『日台会話大全』	杉原之助(元台湾總督府学務課)	1937(第23版)/1902(初版)	新高堂書店	烏オオ、羅コオ、土ト・オ、五ゴオ、南ホオ、給ホオ、布ボオ	羅オワ、羅ソワ、刀トワ、射トワ、号ホワ、無ボオ/学オ		羅キワ、燒シワ、辰ジワ、招チワ、笑チワ、羅ヒヤ/羅ヒヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
42. 『新訂日台大辞典』	台湾總督府	1938	台湾總督府	烏オオ、羅コオ、古コオ、五ゴオ、羅ソオ、盧ホオ、南ホオ、給ホオ、布ボオ、路ロオ	高ワ、高ワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、高コワ、刀トワ、好ホワ、羅ガワ/高ロ		唎キワ、小シワ、羅キワ、相シワ、笑チワ/借チヤ、着フヤ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」
43. 『台湾語教科書』	台湾總督府警察官及司獄官講習所	1944(改訂第11版)	無名会出版部	烏オ、結コオ、租リオ、戸ホオ、路ロオ	高ワ、羅ワ、例トワ、高コワ、高コワ、刀トワ、号ホワ、羅ロワ		唎キワ、小シワ、燒シワ、辰ジワ、招チワ、羅ビワ		ゼロ声母且つ二重母音の語類に来る「ウ」